

古典の臚化表現・省略表現の読解

——宇治拾遺を中心に——

櫻井光昭

はじめに

筆者は、さきに本誌第九十七集に、

「技術としての古典読解法」の構想

を発表した。それは、句読法と視覚法（段落法）とから成るものであったが、標題の場合、視覚法の趣旨に基づく実践から明確になつてきた事項である。

視覚法の趣旨を二点に絞って挙げるならば、第一は、

その名称のとおり、叙述内容をできるだけ視覚的に、あるいは具体的に脳裏に再現しつつ読解を試みる

ことである。理解しやすいように、テレビなどで見るように映像化するつもりで読解を試みるなどと説明することもあるが、必要があれば、また、可能であれば、視覚・嗅覚・触覚等の面での具

体化にも留意すべきである。第二は、説話などの大筋の、全体あるいは部分を通して矛盾がないよう留意する

ことである。本稿で取り上げる問題は、「特に矛盾がないよう」ということを冠して、「整合性を重視する」という第二の視点で精読しつつ、第一の視点をも組み合せることによって得られたものである。

まず、臚化表現の存在を確認して、それに対する読解法をのべ、次に、省略表現の存在を確認して、それに対する読解法を述べることにする。

おそらく、臚化表現も省略表現も、和文体の文章に固有のものと思われる（この和文体という概念は、十一世紀・十二世紀のそれを基準としたものである）。資料として引用する『宇治拾遺物語』の文章は、十三世紀前半の国語資料と目され、和漢混淆現象の一般化が看取されるが、その中の和文体的特徴を有する表現二種に着目したことになる。なお、筆者は、『宇治拾遺物語』の文体を中世和文体と命名することを提唱したが、本稿では、これ以上触れない。

一、醜化表現とその読解法

醜化表現、あるいは、醜化法に関する解説は、あまり辞典類に記載されていない。『日本文法辞典』三十頁「修辭法」（山口仲美氏執筆）に、五十嵐力氏『新文章講話』による次の解説がある。

（一）主として醜化の原理に基づく修辭法としては、次の三種類があげられる。①稀薄法―人の感情にあたる事物をほかという方法。②美化法―美しい事物によそえていう方法。

③曲言法―遠回しにいう方法。

右にいう醜化の原理とは、結体の原理と表裏をなすもので、

第一の結体の原理とは、「無形の事理を凝固せしめて、見る様に触るゝ様に感ぜしめるもの」であるが、これは、第二の醜化の原理「鋭く人の感を惹く事物をほかす」とは、正反對で、それぞれの原理が要求するところも全く正反對であることを示す。

と説明されている。筆者の言う醜化表現は、右の①～③の中では、

③曲言法に近い。すなわち、

醜化表現とは、名称・数量など関係するキャラクター・とき・ところ・もの・ことなどが具体的に明らかな事実に基づきながら、名称・数量など具体的事実を明示しない表現を言う。

このような醜化表現は、十一・十二世紀の和文体の文章の一般傾向とも目せるが、本稿の目的は、技術としての古典読解法に資することにあるから、その表現の基づいている具体的な事実が

ある程度推定しうる場合に限定して、当該表現を醜化表現と呼ぶ。

さて、以下において、宇治拾遺を資料として、いくつかの説話について、醜化表現の存在を証明し、それに対する読解法はどうあるべきかを検討していくことにする。醜化表現の存在の証明には、宇治拾遺の説話と、同文の説話を有する先行説話集『古事談』の説話とを対照比較して行う。古事談の同文の説話とされるものは、日本古典文学大系『宇治拾遺物語』解説（西尾光一氏）によれば、二十話を算するが、その中から、二三例を宇治拾遺の説話の配列順に取り上げる。

経をめでたく読けりの場合　まず、第一話の冒頭は、次のとおりである。

今はむかし、「道命阿闍利」とて、傳殿の子に、色にふけりたる僧ありけり。和泉式部に通けり。経をめでたく読けり。

（宇治拾遺第一話）

問題は傍線部分である。ここに該当する部分を古事談から引用する。

そのおんじやうふゆ。
其音声微妙ニシテ、読経之時、聞人、皆發二道心一云々。

（古事談卷三第二百三十一話）

すなわち、道命の声は、すばらしくいい声で、その声で経を読むときは、聞く人はみな道心を起したという。古事談記載の事実と比較してみると、「経をめでたく読けり」が醜化表現であることは、明白である。古事談の記述から離れて、宇治拾遺の「経をめでたく読けり」を醜化表現と推定した場合、宇治拾遺の同話から、どの程度の具体的事実が把握できるであろうか。同話

の梗概は、道命が和泉式部と寝たあと、心を澄まして法華經を読んだところ、夢に五条の道祖神が出て来て、いつもは梵天・帝釈などの諸天が聴聞なさるので、自分などはお側に寄ることもできないが、今夜は身を清めないで読經をなさったので、諸天のおいでがなく、自分がゆっくり拝聴できて、この世ならず永世の喜びであると述べたというのである。このあとに、読經をする際には、いかなる場合でも、身を清く保つべきだと教訓が付いている。この教訓から、不浄の身で読經したという事実が目が移りがちであるが、道命の非凡な読經の才能を看過してはならない。『枕冊子』に「読經のかうじはかほよき」とあることから、この場合、声は朗々として、きわめて美声であつたに違いない。古事談の「音声微妙」である。また、読經の際は、平生は梵天・帝釈など諸天が聴聞に来るといふのは、聞く人は非常に深い感銘を受け、仏の教えをありがたいたい、尊いと思うことであらう。事実、諸天が来なかつた今晚は、かねがね聴聞したいと思つていた道祖神の希望がかない、世々生々忘却しがたいと、その感激を述べている。一言で表現するならば、聞く人はみな道心を起こしたと言つてもよいであらう。

すなわち、宇治拾遺の叙述から、この程度の具体的事実把握できるのである。

いみじうくらかりける夜の場合　まず、宇治拾遺第七話の冒頭を引用する。

大和国に龍門といふ所に、聖有けり。住ける所を名にて、「龍門の聖」とぞいひける。そのひじりのしたしくしりたり

ける男の、明くれしゝをころしけるに、「ともし」といふ事をしける比、いみじうくらかりける夜、照射に出にけり。

(宇治拾遺第七話)

古事談の同文的説話と言われているのは、第二百九十五話である。冒頭の部分を掲げる。

大和国ニ以^レ狩^ヲ為^シ業者、舜^ハ見^ル上人常ニ雖^モ被^シ制止^セ、敢^テ不^レ三承引^ス、依^ニ之^ヲ五月下暗夜、一件ノ狩者、照射ニ出ヌ」トキキテ、(古事談卷三第二百九十五話)

舜見という名であるのに、宇治拾遺では、「龍門の聖」と呼んでいるのも、醜化表現であるが、今は問題にしない。古事談によれば、「五月下暗夜」(陰暦五月下旬の闇夜)であるのに、宇治拾遺では、「いみじうくらかりける夜」と表現している。これは明らかに醜化表現である。なお、「下暗」をシモツヤミとよむ直接の根拠は発見できないが、『色葉字類抄』では「下道」をシモツミチとよんでいるし、「暗」にはまさしくヤミの訓がある。『今昔物語集』には、シモツヤミの例が三例あるが、いずれも「九月」である。

①九月ノ下ツ暗^{こゝろ暗}の比ナレバ、極^{きはめ}テ暗クシテ、何^{いか}ニモ物^{もの}不見^{みえ}ズ。

(今昔卷二十七第二十二話)

②九月ノ下ツ暗ノ比、燈^{ともし}ト云フ事ヲシテ (今昔卷二十七第三十四話)

③九月ノ下ツ暗ノ比ナレバ、ツ、暗ナルニ (今昔卷二十七第四十三話)

もともと陰暦下旬のことであるから、真の闇夜であるが、①③

には、それがよく示されている。

花山院の御時に五月しもつやみに、さみだれも、すきて、いとおどろ／＼しくかきたれ、雨のふる夜、（大鏡・太政大臣道長）

このあと、帝は「こよひこそ、いとむつかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだに、けしきおぼゆ。まして、ものはなれたる所など、いかならん」と仰せられて、かの有名な、道長ら三人の肝試しが始まる。この場合は、シモツヤミだけでなく、雨が加わっているが、もともと暗いのである。月は五月である。

辞書の解説には、照射（トモシというよみは、色葉その他にある）は、夏の夜の鹿狩りである。和歌においても、照射は、五月闇、下つ闇、鹿などとよく一緒に夏の歌によまれている。

ところで、宇治拾遺の「いみじうかりける夜」からは、どれだけの具体的事実が把握できるであろうか。照射との関連で、太陰暦であるから、月の下旬の夜、つまり、下つ闇までは間違いない。次に、季節は、辞書の記述に従うならば、夏である。ただ、今昔の用例②の照射の季節が秋の九月なのが、一つの例外になる。巻二十七は鎌倉期の鈴鹿本が残っており、信頼できる巻である。

和歌の慣習など、一般人には観念的に照射は夏の行事だと思われていたであろうが、実際には、秋の狩猟も行われていたかもしれない。一般論として、季節を夏と認めるとすると、認める以上、陰暦五月まで認めるべきである。そうでなければ、つまり、狩猟の実態からは秋もあるので、夏秋ということになる。

祈申にの場合 第六十四話は短い説話である。まず、前半を引用

する。

これも今はむかし、式部大輔実重は、賀茂へまいる事ならびなき物なり。前生の運おろそかにして、身に過たる利生にあづからず。人の夢に、「大明神、「又実重きたり。／＼」とて、なげかせおはします」よし、みけり。

実重、「御本地をみたてまつるべき」よし、祈申に、有夜、（宇治拾遺第六十四話）

問題は傍線部分である。口語訳は、「お祈り申し上げているうちに、ある晩」といったところである。「祈り申すに、アル夜」で、「アル夜、祈り申すに」ではないから、敏感な読者は、この御本地を見たいという祈願はどのくらいの期間にわたってしたのかと思いをいたすかもしれないが、うっかりすると看過してしまうところである。古事談の該当部分では、

実重、「可^{さねしげ}奉^{ごんがけ}見^み御本地^{ごんがけ}」之由、多年^{としをまたまつるべき}祈^{こころをいす}三^{さん}讀^{よみ}之^の、或夜^{あるよ}、（古事談卷五第三百四十九話）

となっていて、「多年」が明示されている。宇治拾遺の「祈申に」は臚化表現である。「賀茂へまいる事ならびなき物」であって、大明神は、「又実重きたり。／＼」と嘆いているという叙述からも、少なくとも、何年も参詣し続けているという事実は把握できる。口語訳は「（何年も）お祈り申し上げているうちに」とすべきである。

以上、臚化表現の存在とそれに対する読解法の必要なことを述べた。

二、醜化表現読解の実例

前節では、古事談と対照比較しながら、一方、宇治拾遺の当該説話内の叙述内容から具体的事実を把握することによって、醜化表現の存在を明らかにしてきた。本節では、宇治拾遺の説話だけを対象として、醜化表現読解の実例を挙げたいと思う。

どゞめきくるをとすの場合　まず、第三話の冒頭部分を引用する。

これも今はむかし、右の顔に大なるこぶある翁ありけり。大かうじの程なり。人にまじるにをよばねば、薪をとりて世をすぐる程に、山へ行ぬ。雨風はしたなくて、かへるにをよばで、山の中に、心にもあらずとまりぬ。又きこりもなかりけり。おそろしき、すべきかたなし。

木のうつほのありけるに、はい入て、目もあはず、かゞまりて居たるほどに、はるかより人の音おほくして、どゞめきくるをとす。いかにも山の中に、たゞひとりゐたるに、人のけはひのしければ、すこしいきいづる心ちして、みいだしければ、大かた、やう／＼さま／＼なる物ども、あかき色にはあき物をき、くろき色にはあかき物をたうさぎにかき、大かた、目一ある物あり、口なき物など、大かた、いかにもいふべきにあらぬ物ども、百人ばかりひしめきあつまりて、火をてんのめのごとくにともして、わがめたるうつほ木のまへに、居まはりぬ。大かた、いとゞ物おぼえず。(宇治拾遺第三話)

いわゆる「こぶ取りじいさん」の説話である。この説話に関し

て、醜化表現以外の、視覚法による読解については、すでに述べたことがあるので、要点のみを略述したい。

第一に、夜、百人の異形の者どもの通行ということになれば、これは「百鬼夜行」である。

第二に、翁は「雨風はしたなくて(雨や風が非常ニ激シクテ)」帰宅できず、やむをえず山にとどまったはずであるのに、鬼は松明を「天の目(太陽)」のごとくに」ともすことが、なぜできるのか。また、山中には、けもの道ぐらいしかなはずである。それなのに、百人の鬼が行列を作って通行できるのはなぜか。また、百人の鬼が車座になって酒宴を催し、部下の鬼どもが次々に舞い踊って、横座の鬼のきげんを取り結ぶ。そのような広場が、なぜ山中にありうるのか。このような疑問を解決するための説明として、翁が木の洞穴に入ること、鬼の夢幻の世界に参入するための儀式であると、筆者はした。理由は、関敬吾氏によれば、この説話は、隣のじいという分類に属し、おむすびコロリンの話も同系統で、こぶ取りじいさんの話の中には、翁が洞穴に入ると、奥で鬼が酒宴をしているという筋の話も存在するからである。

つまり、翁が木の洞穴に入った時点で、山中であること、悪天候であることなどの、それまでの自然環境の制約から解放されることが、以下の(醜化表現の)読解の前提となる。

まず、「とゞめき」の語形の確定である。日本古典文学大系はじめ諸校注書では、「とゞめき」としている。おそらく「とどろく」からの類推であろうが、根拠がない。名義抄に「鬨」の訓として「ドミメク」があり、日ポにも「Dodomegi, qu, eita」の項

があるので、「どゞめき」とよむ。

次に「どゞめきくるをとす」の解である。長野悺一氏は『宇治拾遺物語 上』(明治書院)の頭注5で、

地響き立ててやって来る音がする。諸注みな「がやがや騒ぎ立てながらやって来る音」と解しているが、それは上文「人の音」で、「どゞめき来る音」脚音をさし、区別している。

とされているのは、当を得た指摘で、筆者もこの線の延長上で考えたい。日本のドドメクの解説は「大騒ぎしてやかましい音を立てる」であるが、如上の理由で参考にとどめる。前掲の名義抄のドメクの訓があてられていた「闌」の意味を『研 漢和字典』で調べると、ここに該当する解説は「どんどんという車馬の音の形容」である。また、『色葉字類抄』で、ト、メクという訓のあたっている「駢隠」の意味を『大漢和辞典』で調べると、「車騎の音、又、鐘鼓の音」と解説されている。「駢」自体の意味には「車馬の音」がある。ということは、「闌」「駢隠」とも、つまり、ドドメクは、車馬の音がガラガラパカパカとするという意と解せる。「どゞめきくるをとす」は、貴人の乗る牛車の音、騎乗の侍の馬の足音など、ガラガラパカパカと近づいてくる音が聞こえるというのである。

これでは、あまりにも大胆な説だと思われる方があるかもしれない。古字書と漢和字典による意味の追求は意外に効率の高い方法である。この方法による他の事例を挙げておく。それは、第五十七話の「石橋」の意味である。ある女が石橋を踏み返して行ったあと、その下から小さな蛇が出てきたという筋である。女性が

踏み返せる石橋とはどんな橋であらうか。名義抄でイシバシの訓を持つ字に「砦」がある。この「砦」の意味を『研 漢和字典』で調べてみると、「飛び石」と解説されていて、第五十七話の文脈にぴったりとあてはまる。この飛び石の意味の解説は『時代別国語大辞典 上代編』『角川古語大辞典』に記載されている。

第三話の百鬼夜行の一行が、鬼の貴人とその部下の一行であることは、前掲の引用部分に続く箇所でも明白である。

むねとあるとみゆる鬼、横座にゐたり。(中略) 酒まいらせ・あそぶありさま、この世の人のする定也。(中略) 横座の鬼、盃を左の手にもちて、えみこだれたるさま、たゞ、この世の人のごとく(ゴトクは御所本・龍門文庫本ではゴトシ)。

という有様で、「この世の人のするとおりだ」「この世の人のように」と繰り返している。これは、この世の貴人の酒宴に変わらないうと叙述しているのである。横座の鬼は、

「こよひの御あそびこそ、いつにもすぐれたれ。たゞし、さもめづらしからんかなでをみばや」

とか、

今より、此翁、かやうの御あそびに、かならずまいれ」

とか、自己を(翁も含めた)周囲の人間よりも上位者とした発言に終始している。したがって、行列を作る際にも、横座の鬼は牛車に乗り、話中で三番の鬼が活躍するから、二三の主だった鬼は騎乗、他は徒歩ということが十分想定できる。当時の人間が、鬼の社会も人間の社会と同じく身分階層があり、身分の低い者の方が大勢いると考えていたらしい事実が今昔の説話に窺える。すなわ

ち、

此鬼道ノ中ニモ、亦差別有テ、其ノ主伴ヲ定ム。其ノ員尤モ多シト。(今昔卷九第三十六話)

これは、人間の質問に答えて鬼が説明した言葉の最後の部分である。このあと、鬼は、鬼の死後、どこに行くのかは、人の死後と同じく、わからないと答えている。

現在、われわれがクラクションの音を聞けば自動車近くに来ていると考えるのと同様、宇治拾遺第三話の世界において、車馬の音を聞き、大勢の人の話し声を聞いた場合、貴人の行列を想像するのは、当然の成り行きだったと考えられる。

臘化表現は古典に一般的な存在であり、たとえば、言フ一つ取っても、多くの応用例が見つかるはずである。

三、省略表現とその読解

省略表現は、普通の「言い差し」を指すのではない。すなわち、省略表現は、前後の文脈から当然あるべき動作・作用等の叙述が省略されている表現を言う。

叙述の省略の認定にあたっては、現代語の感覚に頼るほかはない。実例を挙げる。

第五十三話は、「狐、人ニ付テシギ食事」である。狐が女に取りついて、「しとき餅が欲しい」と言うので与えたあとの場面である。

「紙給はりて、これつゝみてまかりて、たうめや子どもなどにくはせん」といへば、紙を二枚ひきちがへて、つゝみたれ

ば、大きななるを、こしについはさみたれば、むねにさしあがりてあり。(宇治拾遺第五十三話)

「紙を頂戴して」と狐(つきの女)が言ったあと、狐(つきの女)がしとき餅を紙で包んでいるのであるから、家の者が、当然紙を与えているはずである。その動作の叙述が抜けている。傍線部分のあと、この叙述が省略表現になっている。

省略表現は、口語訳の際、カッコに入れて補う。右の引用部分の口語訳の一例を示す。

「紙を頂戴して、これを包んで、おいとまをして、おばあさんや子どもたちに食べさせたいと思います」と言うので、(家の者が紙を与えたところ)紙を二枚たがい違いにして、しとき餅をつつんだので、相当かさばったが、それを狐(つきの女)が腰の帯のあたりににはさみこんだので、胸の方までふくらんでいる。

もう一例、挙げる。

これもいまは昔、伏見修理大夫のもとへ殿上人二十人ばかりをしよせたりけるに、俄にさはぎけり。さかな物とりあへず、^A沈地の机に時の物ども色〱、たゞをしはかるべし。^B盃たび〱になりて、をの〱たはぶれいでけるに、既に黒馬の類すこし白きを二十匹たてたりけり。移の鞍二十具、くらかけにかけたりけり。^C殿上人、酔みだれて、をの〱、此馬にうつしの鞍をきて、のせて、返しにけり。(宇治拾遺第七十一話) 裕福で知られた藤原の俊綱の家に殿上人が押し掛けた説話の前半部分である。傍線部分Aの「沈地の机に時の物ども色〱」の

下には、置いて出したといった動作の叙述があるべきはずである。これも一種の省略表現である。なお、この下の「たゞをしはかるべし」は一般的な鹽化表現で、そのみごとさ、豪勢な接待の様子について言うのである。傍線部分Bの「盃たびく」になりて」の下には、酒宴が終わったという事態に関する叙述があるべきはずである。それが抜けている。これも省略表現である。傍線部分Cの「殿上人、酔みだれて」の下には、当然、殿上人が帰ろうとした動作の叙述が来るはずである。これも省略表現である。これらの省略表現をカッコに入れて、右の部分の口語訳の一例を示す。

この話もそれは昔のことなのだが、伏見の修理の大夫の家へ、殿上人二十人ほどが押し掛けたので、修理の大夫の家では、不意の来客の接待で大騒ぎをしたことであつた。酒のさかなの用意がなく、沈香の木の木地の机の上に季節の木の実・魚鳥などをさまざま（置いて出したが、そのみごとさ・豪勢な接待の様子）は）ただ推量すべきである。酒盃の応酬が度重なつたあげく（酒宴が終わって、それぞれ冗談などを言つて外に出たところ、馬屋に黒い馬で額の所がちよっぴり白いのを二十ぴき繋いであつたことだ。乗り替え用の馬の鞍二十箇が鞍掛けに掛けてあつた。殿上人たちは、いいごきげんに酔っぱらつて（帰ろうとしたところ）、修理の大夫の家では、これらの馬に乗り替え用の鞍を装着して、殿上人をそれぞれ乗せて、帰宅させてやつたのであつた。

右に挙げた各例は、単純素朴なものであるが、これが技術としての古典読解法の基準となるべきものと考ええる。

清水好子氏は、『源氏物語の文体と方法』「野分の段の遠近法について」で、『源氏物語』「桐壺の巻」の複雑な文章表現について精緻な分析をしておられる。これは、筆者が今まで述べてきた方法に当てはめれば、省略表現が比較的近くに二箇所続き、前者の中に人物視点表現が組み込まれ、あとの省略表現と微妙に響きあっているものである。以下、氏の御高論に依りながら、要点を述べてみたい。次の①の引用部分は、桐壺の更衣の死後、鞍負の命婦が帝の命を受けて、亡き更衣の母君を弔問するところである。

①命婦かしこにまうでつきて、かどひきいるゝより、けはひあはれなり。やめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひたてゝ、めやすきほどにすぐし給へる、やみにくれてふしゝづみ給へるほどに、草もたかくなり、野わきにいとゞあれたる心地して、月影ばかりぞ、やへむぐらにもさはらずさしいりたる。みなみおもてにおろして、はゝ君もとみにえ物ものたまはず。

右の引用部分①の省略表現二箇所を明示するために、少し乱暴な処置であるが、できるだけ単純な形に直すと、

②命婦かしこにまうでつきて（省略表現甲）、みなみおもてにおろして（省略表現乙）、はゝ君もとみにえ物ものたまはず。

となる。省略表現甲は、「南面二下ロシテ」とあるから、牛車の轅を下ろす、つまり、今まで命婦は牛車に乗って通行してきたことが判明する。これは、当時の人なら、帝の使が牛車に乗らず、徒歩で出発するとは、予想だにしない、いわば常識であつたろう。つまり、命婦は「かしこ」（目的地）に到着して、邸内も車乗のま

ま通行したことがわかる。この事実が抜けていて、省略表現なのである。次に、省略表現乙についてである。「南面ニ下ロシテ」から「母君モトミニエモノモ宣ハズ」に至るまでには、相当の応接の動作がぬけている。命婦に関しては、まず、車から下りて、寝殿に通らなければならぬ。次に、母君に挨拶をするはずである。その言葉が胸がいっぱいになっていて、なかなか出てこない。やっと挨拶をする。この言葉がなかなか出てこないということは、「母君モトミニエモノモ宣ハズ」の「モ」から判明する事実であって、清水氏がはっきり指摘されている。従うべきである。一方、母君については、少なくとも命婦を出迎えて相対したであろう。これらが抜けていて、省略表現であることが判明する。ただ、命婦が胸がいっぱいになって……の部分については、補足が必要である。それが省略表現甲に組み込まれた人物視点表現である。ここで、②と比較しながら、①の引用文に戻る。つまり、省略表現甲の一部に相当する部分③が命婦の視点による表現である。それは、

③ かどひきいるゝより、けはひあはれなり、やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくるひたてゝ、めやすきほどにてすぐし給へる、やみにくれてふしゝづみ給へるほどに、草もたかくなり、野わきにいとどあれたる心地して、月影ばかりぞやへむぐらにもさはらずさしいりたる。

であって、牛車の進行とともに月光に照らし出される、女主人が心の張りを失った結果、八重葎に荒れて哀傷があたりを覆っている邸内の光景である。この人物視点表現と「母君モトミニエモノ

モ宣ハズ」の叙述とが響きあって、微妙な重層性をかもし出している。『源氏物語』の表現の重層性がよくわかる部分である。

右の源氏の省略表現から想起されるのは、古典文学作品には、テどめの文があるという説である。現に、吉沢義則氏『校源氏物語新釈』では、

みなみおもてにおろして。

と、テどめになっている。山岸徳平氏『日本古典文学大系』、阿部秋生他四氏『完日本の古典』では、読点になっている。『枕冊子』の場合、小西甚一氏がテどめの例として、五例ほど挙げておられる。そのうち、池田亀鑑氏『日本古典文学大系』、萩谷朴氏『新潮日本古典集成』でも、句点でテどめとしているのは、次の一例だけである。

卯月のつごもりがたに、初瀬にまうでゝ、「淀のわたり」といふものをせしかば、船に車をかきすゑていくに、さうぶ・こもなどのすゑみじかく見えしをとらせたれば、いとながかりけり。こもつみたる船のありくこそ、いみじうをかしかりしか。へたかせのよどに」とは、是をよみけるなめり」と見えて。三日かへりしに、雨のすこしふりしほど、さうぶかるとて、かさのいとちいさき、きつゝ、はぎ、いとたかきおのこはらはなどのあるも、屏風のゑに似て、いとをかし。(枕・卯月のつごもりに)

それぞれの校注書によって、同じ句点で止められていても、細かい解釈は異なると思われるが、筆者は、前述の省略表現がここ(テの下)にあると見たい。したがって、「見えて」の下は読点と

する。まず、冒頭に近い「初瀬にまうで」は、「初瀬にまうでんとして」の意である。これが陰暦四月の末である。その晩は、「市は」の段のように、また、源氏の右近や玉璽のように、椿市に泊したとする。翌日（五月一日）は初瀬に参籠、下向して、また（五月二日）椿市一泊、五月三日、再度「淀の渡り」といった日程が想定される。この章段は「淀の渡り」に関心があるので、たまたま、それが初瀬参詣の往還だったのにすぎない。

陰暦四月の末時分、長谷寺に参詣しようとして、……（中略）……と思われて（それから、長谷寺参詣をすませて、また、この淀の渡りを、三日、通って帰ったが（下略）。

と、カッコ内を補って口語訳される。往路は日常的光景を中心とし、復路は、日常的光景に重ねて、五月五日端午の節句に備えて菖蒲を刈る光景を叙述している（三日が明示されないと、端午の節句との関係がばやけてしまう）。省略表現の一例である。

さて、臘化表現か、省略表現か、分類上、ボーダーラインにある場合が、もしあったら、臘化表現に分類する。もっとも、読解に支障がなければよいのであるから、分類にそこだわるもので

はない。

付記 使用テキストは次のとおりである。なお、引用文中の振り仮名等は私に付したものである。

櫻井光昭編『三本対照 宇治拾遺物語』武蔵野書院（伊達本）。

小林保治氏『古事談』現代思潮社。

山田孝雄他四氏『今昔物語集』（日本古典文学大系）岩波書店。

秋葉安太郎氏『大鏡の研究上巻本文篇』桜楓社出版。

池田亀鑑氏『源氏物語大成校異篇』中央公論社。

田中重太郎氏『校本枕冊子』古典文庫（三巻本）。

注（１） 櫻井光昭「敬語の表記から見た『宇治拾遺物語』の文体」『国語

語集史の研究』第十一輯掲載予定。

（２） 櫻井光昭「視覚法による古典の梗概分析の実察——『宇治拾遺物語』を例にとって——」『学術研究』第三十七号。

（３） 小西甚一氏『通解 枕冊子通釈』金子書房二二三頁。

（４） 櫻井光昭「平安時代語の時の表現」『国語学』百十二集。